本果院日朝聖人に関する研究（三）

史料「甲陽休息山立正寺之來歴」紹介とその意義について

原井慈鳳

一、はじめに

本果院日朝聖人が文正元年（一四六六）十月二十五日遷化されてより来る平成二十七年は五百五十遠忌に当る。聖人真蹟文書は縁深い沼津市岡宮、光長寺に於いても甲州市休息、立正寺に於いても聖人開創各寺院に於いても御本尊・宗祖御書写本・御聖教写本類の伝存は明らかであるが他の御真蹟はよく知られていない。また同時代の行学院日朝聖人と混同される場合があり、御本尊の混同の事例がある事も指摘しておきたい。[1] 光長寺は天文十四年（一五四五）八月甲斐、武田信玄の駿河進攻の兵火に遭い、立正寺は天正十年（一五八二）三月織田信長の武田勝頼追討の兵火に罹り伽藍と共に数多の霊宝、文献を失った。当立正寺は今は日蓮宗に属するが、宗祖開山、二祖日法聖人、三祖日乗聖人、七祖、中興本果院日朝聖人と法燈継承の由緒あり、光長寺と両山一寺と称される法華本門の一本寺であった。日朝聖人御事蹟に関し、立正寺に就いては、先学により古過去帳の「歴譜の外に聖人の記録は見出せない」と論述されてきた。[2]

而して二十数年以前何等かの手掛かりを得べく休息立正寺周辺を頻繁に訪れ時の山主岩佐宣人師のご好意によ

り所蔵文書の閲覧を重ねることができた。当山には霊宝の外に江戸中期文書が各種伝存しており周辺地域一帯の調査を同時に行う過程で重要な情報を見出す事ができた。これらを整理して信頼できる史料・金石文・周辺史実との整合性により日朝聖人の知られざる御事蹟の一端を報告させて頂く事となった。

即ち昭和六十一年『興隆学林紀要』一号に日朝聖人による御事蹟として「休息立正寺移転造営事業について」を発表し真言修験の宗派の時宗祖の『立正安国論』講演の縁に接し、日法聖人の布教により法華宗に改宗した当時の伽藍の地を移し、新たな立正寺を造営した事情を記させて頂いた。[3] 昭和六十三年同じく、同『紀要』二号に「日朝聖人上洛の背景について」を発表し、日朝聖人が上洛を果たし、日隆聖人と面会された史実につき法華本門の法流を東西に通用された時代背景を探って東国法華教団の動きを記させて頂いた。[4] 右の論文に休息立正寺所蔵の多くの文献を引用したが中でも『甲陽休息山立正寺之來歴』なる宝永三年（一七〇六）五月良日、己心院日退師著作の書は信憑性が高く示唆する点が多い文書であった。[5] 同寺に蔵される天明元年（一七八一）九月の記録『當山旧記控』にも「寺歴ノ委細悉知ハ日観、日退両巻ノ書ニ有之可見」とあり立正寺二十二世住真院日観師、同二十六世己心院日退師の記録を挙げている。日観師の記録は何れを指すか不明で署名なき物語風の冊子本があるが是を措き[6]他の一巻とは日退著、巻子本『甲陽休息山立正寺之來歴』を指すものと思われる。貴重史料として今回同書全文を紹介する事とした。当書の書誌学的考証は更に必要であり、今回の小論は原書全文紹介を目的とすると共に著者己心院日退師の足跡既観、引用書の根拠、引用書の所在、内容問題点の指摘を試みたものである。

二、著者己心院日退師のこと

己心院日退師については前掲拙稿にても紹介してあるが当立正寺に於いては特筆すべき位置に在ると考えられ、再確認して置きたい。

歴史研鑽に於いても寺法の制定に於いても師の足跡は注目に値する。寺歴書である『立正寺之來歴』著作に先立って宝永三年一月五日には『立正寺眞俗萬代不易之法式』五十一箇條を制定し真蹟巻子本が同寺に伝存している。その内容は立正寺護持の基本、法式作法、境内伽藍、竹木に至るまで保護、山内各坊、末寺に至るまで荒廃を防止するための僧俗の在り方と然るべき方策が記されている。即ち、貫首をはじめ僧侶の参院（晋山）や遷化の都度、御霊宝、御朱印は勿論、惣じて仏像、経巻、一切の什物什器、田畑等山内六坊全て明細にし、破損、紛失を禁じ松、杉の苗木を年々植林することまで示している。同書巻末に「為法為寺未來永々堅可相守之若於違背之輩者依于其過罪之品急度可任其法者也」と厳密に遺戒し僧俗の遵守規範を示した。

日付けの一月五日は二祖中老和泉闍梨日法聖人の命日であり日退師の意図された聖日と見える。日法聖人尊崇の意は他書にも散見される。

立正寺第十九世日眞聖人（宝永六年一月遷化）の述懐が古記録に存し、延山日暹師[7]の代、休息（立正寺）と小室（妙法寺）の座配の序列の議論があった時「日暹師ノ曰ク両寺倶ニ中老開闢ニシテ各由緒之アル旧寺也、但高祖御入滅之後延山之御番、日法師ハ之ヲ勤メ日傳師[8]ハ之ヲ勤メズ然ラバ則チ日法師ハ延山之貫主役ト成リ日傳師ハ其ノ義無シトイヘリ是一ツ、又中老十八人之次第日法師ハ為前キ、日傳師ハ之ニ次ぐ是二ツ、休息ハ安國論御講之霊場也、自今已後休息を左ト為シ小室ヲ右ト為ス[9]」と記される。更には「公方様御疱瘡ニ就キ出江登城ノ時」即ち身延山日境師らと休息の貫首が将軍病気平癒祈願のため江戸城出仕の折この由緒は重んぜられたという。これらは日退師収集の記録と思われ、宝永七年（一七一〇）十月、甲府城の御能拝見、正徳元年（一七一一）一月

甲斐守殿への年賀、更には正徳四年（一七一四）松平美濃守、即ち柳澤吉保[10]（甲府藩主）葬儀の折、日退師自身が出座し、その座配は重んぜられた事も『當山日記控』に見える。

立正寺にては師は永代千部本願と称され、同寺に記念の石碑が建つ。宝永年間（五年仲春）宗祖断簡、伝日朗聖人、日法聖人両断簡、本果院日朝聖人真蹟本尊等多くの表装修復を行っており各軸装に自筆裏書きが認められる。什物に於いては宝永、正徳年中南獄、天台、章安、妙樂、傳教大師の位牌修復、征夷将軍武運長久牌にも師の修復の墨書が残る。

日退師は立正寺藏、享保六年（一七二一）三月の過去帳[11]によれば享保五年（一七二〇）十二月二十九日遷化され在山十一年と記される。宝永三年九月は江戸大地震、宝永四年は十月に東海地方に大地震があり甲駿（山梨、静岡）に被害が及んだ。富士山宝永山噴火はその直後十一月二十六日の事であり、日退師の立正寺在山中は自然災害の甚しき時代であった事も記して置きたい。

三、『甲陽休息山立正寺之來歴』の意義

1　日退師は同書巻末に「旧記を探り伝説を尋ねて筆にまかせて記す……敢て軽漫すること勿れ、唯是れ由緒を廃亡せざらしめんと欲するのみ」と記しその意図を示した。即ち伝來の様々の文書を整理、取捨選択し史実と伝説の混同を避ける配慮をし宗祖行化の年代等は各説を併記して示している。

2　記述には出典を示し、実在の本尊と添書き、各山先師真蹟等確実なる史料に基づく客観性を具備し今日に出典史料が多数現存する事実を指摘したい。

3　地誌、地政学にも意を用い古歌や民間伝承、古地名の引用、幕府御朱印や武家文書の引用など多面的な視点を有している。

4　法華宗に勝劣、一致の分派が生じた状況を示し、休息立正寺として岡宮光長寺、身延山の両山との交渉と情況変遷、そして光長寺派と分派の理由は敢て示していないがその経緯を具体的に示している。

5　立正寺開創より第十七世日逮師代まで寺門の盛衰が記され、一致派（身延）に改派した後の光長寺派との確執と身延派に所属した後の険しい歴史の実情が垣間見える。

6　聖人滅後最初に一代記の休裁を整えた行学朝師の『元祖化導記』は別として当書は日省師の『本化別頭高祖伝』（一七二〇）以前に著されており宗門史書としてこれを参照し、教団史上最初と称される六牙院日潮師の『本化別頭佛祖統紀』（一七三一）に朔る二十四年前に既に存在した。日退師遷化の享保五年（一七二〇）冬、六牙日潮師は休息を訪れ前本願（日退師）報恩の席に参じた。その時の真蹟詩文が現存し[12]当山が『安国論』以来の古刹である事、結縁ができた事が記される。東西に古記を求めた潮師は日退師の『立正寺之来歴』を閲した事が考えられ『仏祖統紀』の基礎史料となっている可能性が強い。『統紀』には中老十八祖の第一に立正寺が挙げられ「日法上人伝」が記されている。

寺歴書とは申せこの『来歴』は教団初期、宗祖、日法、日乗聖人以来甲駿の宗門の動向をみる江戸中期の貴重史料と言える。また宗祖行化の足跡四箇の道場を示し、最初転法輪の地の意義を明かし特に『立正安国論』に関する宗祖の甲斐行化には致密な考察を加え、休息立正寺が宗祖『安国論』講演の初転法輪の霊地なる事を強調している。

《付記》

本書は宝永年間、江戸中期の文書で日退師が整然と楷書に近い文字で書かれたものである。当時に使用された文字の中に難字があり、訓点入りの文章で難読箇所もある。原書に従い忠実に写したが、活字化するに際し難字は『漢字源』所収の文字にて表現することとし、割書き（割注）の部分に施された細字の訓点は表記が繁雑となるためこれを避け後に付した読み下し文にて表現させて頂く事とした。なお原文の訓点に従い読み下し文を付したが明らかな誤記と思われる箇所のみ是を意の通る読み方として表記した。行数は原文の方は忠実に写した。読み下し文には行の長短が生じた。

なお同書所蔵者である甲州市休息山立正寺現住職、岩佐宣寿師の了解を頂き原文等を記載させて頂くものである。

合掌

◎　書誌略記

・題名…甲陽休息山立正寺之來歴　・筆者…休息山立正寺第二十六世己心院日退　・外題…休息山立正寺之由緒（金紙題簽墨書）　・内題…甲陽休息山立正寺之來歴　・奥書…有（本人、加筆は本文参照）　・年号…宝永三年五月良日　・訓点…有（墨筆、固有名に朱筆縦線）　・界線…有（押界）　・印記…無　・花押…有（己心院日退）　・伝存…山梨県甲州市休息山立正寺（完存）　・表紙…有（紙）　・見返…箔散シ（破損有）　・軸…有（木）　・軸先　無　・紐…有（茶）　・紙数…全五紙　・紙色…白　・本紙法量…縦三四・四cm×横四三二・八cm　・紙背文書…無　・継目印…無

甲陽休息山立正寺之來歴〈原文〉

一　往古當寺ハ眞言家一流ノ之棟梁也霊験ノ地藏大士アテ

大ニ利アリ安産ニ國人珎敬シ士女皈湊ス世擧テ呼テ日フ子安地藏ト矣

往古大士至今安置常時尊崇猶昔不異　數代擇テ於博學多才ノ之秀發ヲ為ス住

持ト也門徒伏ノ仰僧坊亦多シ世人○呼ニ子安千坊ト繫花ナルヿ可レ

知ル矣亦今ノ境外遥ニ隔テ大門渡場ワタバ柏榴畠舞臺畠等所

々舊跡アリ往古ノ境地廣博ナルヿセヨ察矣　柏榴畠古樹木林舞臺畠如下記也于時文永ノ比コロアヒ

吾ヵ祖日蓮大士適ク欲レ爲ニ山居一入リ于當國ニ來ニ至シトフ斯ノ攸ニ地藏堂ノ之

側ラニ有ニ盤石一安坐休息シ即四箇ノ名言ヲハ高聲ニ唱題シ祈リ天下太平

國土安穩ヲ講ニ談シトフ立正安國論ヲ緇素貴賤群集シ厠聽ス謗スル者ノハ多ク

信スル者ノハ少シ偶ク信スル者ノモ機生フノ尚未タスレ熟也是則高祖當國行化ノ

最初也　今比處日休息村宗祖安坐休息之處自呼而日休息終名村也其古日等力郷北原村也

一　宗祖身延入山之後當テ于三年ニ建治第二丙子ノ年宗祖ノ之

直弟中老和泉阿闍梨公日法聖人欲ノ慕ヒ安國ノ講場ヲ

傳ント中立正ノ法流ヲ上

○來テ應ス真門ノ寺主ニ主一タヒ見テ歎ノ曰ク於アヽ戲先師石上ノ講説今

猶ヲ在リ耳ノ底ニ公ノ之芳訊實ニ是レ宿植德本ノ之謂也歟公爲メニ
重テ而講セヨト丐公隨ニ喜シ其ノ請益ヲ再ヒ演フ此ノ論ヲ寺主熟聽シ發露
涕泣シテ一心ニ合掌ス○受ケ法ヲ於法師ニ而信伏隨從シ即與ニ法公一俱ニ登リ
延山ニ對ニ向ノ高祖ニ礼拜合掌シ欽ヒ唱ヘテ吾ヵ師日蓮聖人ト改悔ス舊執ヲ
師讃メ善哉一即稱ニ我弟子日乘ト説法教誡也乘慎テ頂禮シ乃シ
寄セテ我カ寺院ヲ於法公ニ専弘ント此ノ經ヲ發誓メ而去ンヌ則還テ我カ精舍ニ改ヌ本
尊ヲ且ツ仰テ吾ヵ師元祖日蓮聖人第二祖ノ師開基日法聖人ト是則
師資相承ヒ也依レ之後代列メ日乘ヲ於第三祖ニ爲ス草創ノ本願ト矣
乘公号式部阿闍梨傳聞生處當國俗姓鮎澤氏云
又日乘謂テ法公ニ言ク請刻ニ彫高祖之
御影ヲ法公即自ラ刻レ之安置ス于堂ニ尊像現在高祖入滅ノ後ハ者
御影講ニ執ニ行フト児ノ舞ヲ法樂セリ矣
是元自権宗之時児舞執行故也當時廃也舞臺跡今畠則呼言
舞臺畠也
又改ム寺山号ヲ眞門之寺山号不分明也蓋金剛山胎藏寺傳説云高祖休息ノ之處ナレハ
山ヲ号ツ休息ニ安國論講ノ之場寺ヲ号ク立正ト其號立正安國寺于然ニハナレハ第七祖中興日朝改之
號安國山立正寺也云是亦建テ一乘ノ精舍ヲ於國ノ之艮位ニ以テ論題ヲ安スル于
寺號ニ蓋○是則三國守護國家ノ之道場ニ者ノカ歟宗祖ノ言ク佛法ノ
住處ハ鬼門ノ方ニ三國共ニ立ツ也云是則代々相承ノ祈ル于國家
安寧ヲ例年正月五日ニハ掛ケ於靈賓ヲ本堂ニ闔徒抽テハ于丹誠ヲ祈
誓ス矣須レ知宗祖安坐休息ノ専ラ祈リ于天下太平國土安隱ヲ

＊山号ヲ或ハ云ニ子安山ト云

故ニ宗祖天下御祈禱之舊跡（ナルナリ）也是ノ故ニ従リ年始ノ朝タ至リ歳末ノ
夕ヘニ鎮ニ致スコト祈誓ヲ既ニ是レ年久シ也凡ソ宗祖休息ヨリ已來タ至リ今年ニ
四百有三十三年ゝ也権門改宗已後至リ今年ニ四百三十一
年ゝ也乗公四十九歳ニ授法弘法三十五年延慶三庚戌年
遷化シヌ矣星霜八十有三焉爾來至リ今年ニ三百九十七年ゝ
也

一

當寺往古ハ自ニ今ノ地ニ四町南ニアリ七祖日朝移セリ此處ニ朝自ラ植（ウヘ）ニ
萬木ヲ於四方ニ毎トニ植ルニ誦スト自我偈一反（云云）佛閣神社方丈坊舍
悉ク建立スルカ故ニ為ス中興開基ト矣蓋シ古來大小僧坊雖レ多レ之縮メテ
定ム十二房ヲ也引ニ移スカ地ヲ故ニ當寺ヲ云ヒ新立正寺ト彼旧寺ヲ云フ本立
正寺ト于茲松子丸亀壽丸ト云フ兒子アリ有ル聖人（号日建岡宮歴代乎但宗派不見更詳）
亀壽丸ニ與ヘテ漫荼羅ヲ書ス本立正寺亀壽丸殿ト是則新本
立名ノ證處ゝ也八世日饒嫌ヒ于寺號紛爾タルヲ本立正寺ノ之正ノ字ヲ
闕畧ノ名ケ本立寺ト新ノ字亦タ闕ノ如ク古來ト呼フ立正寺ト也従リ日朝（至リ）
○第十七世日逑ニ代々兼職ス矣然ルニ日逑代ニ發心者アリ冷メレ之守ラ本
立寺ヲ而ノ後屬シ他ニ經タリ六十有餘年（其旨別書委悉不違此盡往可知）于時元禄
第四巳未年二十二代日観訴テ是ヲ於公場ニ得ルヲ勝利ヲ疾シ因レ茲
日観更ニ在テ于別職ニ改テ而定ニ立正寺ノ末寺ニ也

一

當寺ト與ニ駿州岡宮光長寺一俱ニ日法師ノ開闢ニシテ而両一寺ヽ也

亦則中老一葉一門派ノ之首ヽ矣中興日朝兼ニ於光長寺ノ職ヲ一

両寺悉ク建立ス也然ルニ日朝盛カニ宣ニテ本勝迹劣ノ之義ヲ洛陽本能寺

開基日隆ト一味同心ノ弘通東西朝ハ東隆ハ西互ニ諾シヌ矣長禄寛

正ノ比アヒ専舛レ之小來休岡両山門流俱ニ歛ス二于延山一ニ也矣傳聞ク

曾式ノ兒舞黎民歌テ曰ク身延法華休息法華ト云云然ニ天正

年中當寺炎焼之節依ニ十二世日業ノ遺言ニ十三世日定代ニ皈ヨ

伏ス一致ノ宗派ニ其旨一下記 凡ソ立ルニ勝劣ノ宗派ヲ一従レ朝至レ業百五十有餘年ヽ

也 従朝已前一致勝劣門流未知以朝之弘通知劣派者歟更詳 抑ク日朝ハ當處ノ出生ノ之人ヽ也両寺

兼職凡ソ四十八年ニメ而於ニテ當寺ヲ一化シヌ焉遺言ニ曰ク盡未來際護ニ

持シ妙法ヲ一可レシト築ニ吾カ廟ヲ於鬼門ノ方ニ則境内林ノ艮位ニ立ツレ廟ヲ也

嗚呼日朝一何シソ誤レル乎ヤ

一

第十二日業代於ニテ田野ノニ勝頼カツヨリ公生害ノ之時天正十壬午ノ年

三月三日辰ノ刻遭ニテ于乱火一ニ七堂伽藍鐘樓鼓樓等方丈

坊舎一時ニ焚焼シ為ルニ郊原ノ地一也往古有来ノ佛像經巻祖師ノ

霊寶法乗両師并ニ歴代ノ本尊朱印黒印古來ノ筆記

珎財等皆悉亡失ヽ當寺ノ之重寶是時廃レリ焉日業

不レ惜ニ身命一飛ニ入テ火中ニ宗祖ノ尊影ト與ニ大霊寶一幅ニ抱テ之

逃ケ去ンヌ于茲竒ナル哉宗祖金地ノ漫荼羅大藏卿ノ之筆宗祖
開眼番神ノ之畫像不レ損ニ一毛一灰中ニアリ實是可レ謂フ火中ノ之
蓮花ト矣爾來金地ノ本尊名テ曰フ青蓮華ノ本尊ト也日業
倩〳〵案スナリ當寺再興センヿ不レ堪ニ我カ力○雖モ欲スト下ハ依ノ一致ニ而方ニ相續セント上年
漸ク衰老ノ而遂ニ未タ果ニ其ノ願一天正十九辛卯ノ年正月三日ニ化シヌ
焉臨ニテ終焉ノ時ニ集メテ付弟實修院日定并ニ大衆ヲ念願ノ旨
趣精ク遺誡セリ矣依レ之同年同月速ニ遣ス寺僧正覺房本
妙房両使ヲ於延山日新聖人ノ之許トニ新師稱美讃歎シ慇懃
鄭重ニ而即事報アリ謂テ被レ任セ二両僧ヲ於結集院主ニ各ノ賜フ于漫荼
羅ヲ至今有但一幅朽損矣正覺坊信行院本妙坊養學院也尓來當寺之一老二老定爲結衆也　又十二房ニ賜フ麝
多羅依十二條ヲ也是則一致改派ノ之印也粤勝コトニツイテ劣不轉ノ
之道俗懐キニ於嗔恨ヲ未寺檀那多ク違背ス焉日定道心
堅固ニ而專遊ニ一致ノ諸門ニ再ヒ建ニ立メ當寺ヲ達スル于先師日
業ノ之遺誡一者ヘ也一致改派ヨリ今年マテ一百六年ヘ也
一　天正十九年二月從ニ　東照宮一當寺方丈坊中諸役免許
并ニ就ニ身延皈伏ニ宗派皈伏ニ古來十二房ノ之外ニ更ニ六房跡寄附
等ノ之芳墨被レ成ニ下シ之ヲ也　入江右近殿同名金七殿随仰第十三世實修院日定所被下一紙至今有矣
爾來新古都テ而十八房ヘ也其中ニ從レ勝ルニ或ハ從ヒ由緒有ルニ之擇テ

坊舎六軒ヲ相ニ定是於役坊ニ令ニ門中ノ衆義ヲノ評ニ定セ之ヲ也又同第

二十壬辰ノ年 文禄改元 二月制札頂ニ戴ス之ヲ也

一

先年亂火ノ之後皈ニ伏ノヨリ一致ノ門派ニ已来タ自ニ新師ニ至ニ乾師一

四代ノ之間蒙リ芳恵ヲ而相ニ續スルカ當寺ヲ故ニ從リ延山一○ 雖下モ欲レ爲ニ末寺ニ往

覆及ワト再三ニ儼然トノ當寺ハ者高祖休息安國講談ノ之霊地

中老一葉法公門派ノ之省ニノ而改宗ヨリ已来タ三百四十餘年ノ之

間一本寺ナルカ故眞俗倶ニ嗾テ不レ承レ之然以ニ四代ノ芳恵實ニ難キヲ

黙止ニ故ニ若末寺ノ之儀式諸役免許シテ如ニ古来ノ爲ニ一本寺ノ之

格式ニ者亦可ニシト相随フ也依レ之乾師並ニ大衆同ノレ聲曰ク有ニアルノ由緒一

之霊場ニノ而格別ノ之舊跡ヽ也取モ可レシト任ニ其ノ旨ニ互ニ領ル深ク諾ノ則慶長

七壬寅ノ年三月第十四世性善院日應并ニ衆徒檀越一味同

心ニノ而終ニ爲ニナル末寺分ト也即時ニ乾師賜フ諸役免許ノ之一紙ヲ也尓来

至ニ今年一八十有五年ヽ也 免許之一章日芳代元和年中自火炎焼之時亡失矣慳哉々々 於是亦タ難レ

忘ニレ○舊執ノ信福ノ檀越却テ而違背シ竟ニ構テ一宇ヲ號シ安國山立正寺ト

爲ニナツテ岡宮ノ末寺ト怨スル一于當寺ニ至レ今不レ止矣 自是十餘町在東村云小林也

一

慶長十乙巳ノ年七月性善院日應適ク詣フテ于延山ニ對ニ向ノ當

貫主日遠師ニ曰ク先年既ニ甚タ爲ニナル延山ノ末寺分ト願ハ爲ニ被レ授ニ與セ常住

本尊ヲ矣遠師○感心シ即應メ而授ニ與ノ三牧續ノ之本尊ヲ曰ク其ノ寺

由緒有レ之故ニ一本寺ノ之格式ヲ也依レ之先年已ニ役儀宥恕セリ
是故今所レ與ヲ本尊亦タ不レ安ニ末寺ノ之言ハヲ也云云後ノ職暹師
授與ノ之形模亦則無シ末寺ノ言ヲ矣是正ク守ル一本寺ノ之格
式ヲ明證ヲ也二幅現在
予謂ヲカモハク劣法改派ト興ニ本末約諾ニ既是成レ二ヲ所ノ願本尊最モ是レ其ノ初ヲ也
常ノ途古來ノ末寺本尊安スルニ未寺ノ之二字ヲ正ニ是レ一幅ノ爲レ要ト況ヤ於ヲヤ今寺ニ
不ス可レ不レ安ニ其ノ言ニ耶于然闕ニ如スルハ之ヲ即是顯ス一本寺ノ之格ヲ也其ノ格
至哉

一 先年ノ之炎燒并ニ宗派皈伏ノ之後日ヒトニ及ヘリ朽邁ニ也然ルニ亦元和
元乙卯ノ年三月六日第十五世日芳自得ミ火災ヲ衰微
增ク至レリ再ヒ不レ堪レ造ニ營スルニ之ヲ闔徒忙然トノ懷レ憂ク而已衆嘆テ曰ク嗚
呼滅亡時至レルカナト乎粤テ岡宮小林等ノ舊執ノ眞俗乘テ斯ノ費ニ
永ク欲レ令ント當寺ヲメ於破廢セ而大ニ敵當ス矣尓時從リ延山被レル加ニ與力ヲ
祝要兩師之代也五月祝師遷化要師入山之故也矣 亦從リ隱士日遠師ニ賜フ懇篤ノ直書ヲ
遠書在今因レ之漸ク再興シス焉尓來至ニ今年ニ七十有二年也

一 慶長二巳丑ノ年八月第十七世日逑蒙リ當寺領十八石
六斗并ニ寺中山林竹木諸役免許ノ之旨ヲ從ニ大猷院殿ニ
御朱印頂ニ戴ス之ヲ也

一　當寺ハ者雖レ爲ニ延山末派一有ルカ由緒一故ニ役儀免除ニノ而一本寺ノ之格式ヽ也其旨如レ向キノ依テ之ニ不レ改ニ往古ノ之寺法一ヲ祖師會正日ニ執ニ行之一四箇ノ大會年中行事等皆如ニ古法一ノ修レ之坊張律師院主

日號ノ之官職亦如ニ舊式一補ニ任ス之一ヲ延山ノ僧衆ト興ニ當山ノ徒衆一曾合ノ座配ハ年老次第ニ定レム之一ヲ住持ハ請ニ于延山一ニ或ハ復逮レ願ヲ也年始継目等ノ之禮式隨ニ時ノ宜一ニ也登山并ニ處々ノ會席色衣紋

＊　白著レス之（傳聞古來聖跡延山之外休息小室東西兩聖甲州三聖人云云）身延門中回章ハ蒙ニ別章（其證遡師一直書有之）弘通勸奬ノ之時ハ任ニ先判一申ニ受ク許狀一ヲ也（已上）

＊　昔日休息小室呼ニテ干兩山一ヲ日ニ東大坊西大坊一ト也

予素文質筆藝並ニ乖ケリ達者モ亦無シ我レ今勞ノ由緒ノ之廢ルヿヲ聊カ探リ舊記一潛カニ尋ニ子傳説一ヲ信セテ筆ニ記ス焉（ママ）哉テ勿レ輕漫スルヿ一唯是レ欲スルノミ令ニ由緒一ヲ不ラ中ト廢亡セ上而已

維時

寶永第三龍集丙戌年五月良日

第二十六世
己心院
日退　花押

追加

一　高祖未至シ玉フ于斯コヽニ時節ヲイハヽ、者或ハ云ニ入國ノ其ノ年一或ハ云ニ其ノ翌年一或ハ云ニ入山ノ身延ヘ已前一皆是傳説ヘ未決更詳

一　高祖當處御休息之日數ヲイハヽ、者或ハ云ニ二夜三日一或ハ云ニ一七日一或ハ又云ニ唯一日一或又云ニ幾日ト云フ其ノ數ヲ不ヒト知亦皆傳説ヘ未決更詳

一　或人曰ク行化最初ト者高祖于斯コヽニ未至シ下フ一若身延入山ノ之後者ヘト云ハヽ最初ノ之言未審ト云ヘ云○予ハ謂ク最初ト者安國論御講即是當國ノ最初ヘ焉全ク不レ論ニ身延入山ノ之前後一也凡ソ高祖處々ノ遊歴須臾ノ之間ヲモ豈ニ無ニ行化一耶然今此處ヲ名ニ一ハ最初一者正ク依ニ于安國論御講ノ之道場ニ者ヘ也抑ク安國論ハ高祖行化ノ之秘要ナル一是レ勿論ヘ也師入ニ于當國一於テカ何レノ處ニ初テ講セルヤ ニ 於此ノ論ヲ耶更ニ無ニ別處一故今最初ト云ハ者唯是在ニ安國論御講一者歟因レ茲レニ乗公改宗ノ之時山ト與レ寺俱ニ改メ其ノ号ヲ稱ニ休息山立正安國寺一即是其ノ證ヘ也例セハ如シ名クルカ比器カ谷妙本寺最初轉法輪ノ之地ト也何者宗旨建立行化ノ之初ハ房州清澄寺ヘ也自来タ西條花房小湊奥津笠森須田藻原等惣ノ而房州上総下総武藏相模經ヲ五箇國一處々ニ行

化シ尚至リ于鎌倉ニ住メ松葉カ谷ノ之小庵ニ而行化シ下フ最甚シ矣干然ルニ安國論ノ
之御製作既成リ所ル入レ比器ノ大學三郎殿之一覧ニ正ク因テ斯ノ縁一
終ニ皈伏ノ而被ル附ニ地ヲ於高祖ニ今ノ妙本寺是也是則宗旨建立ヨリ来タ
安國論行化ノ之最初ヘ也依テ而名テ稱ス高祖最初轉法輪ノ之地一爲コレ
四箇ノ之道場ノ随一ヘ矣既是房州已来處々遊歴ノ之後ヘ也思レ之
然レハ則吾山モ亦是レ當國最初轉法輪ノ之霊地ナル亦誰カ疑レン之賢者
准知セヨ焉

當山末寺赤尾村法蓮寺之由緒

法蓮寺ハ者高祖大士御一宿ノ之舊跡ヘ也原此ノ寺ノ之在處ハ黒川村ヘ也往昔此ノ處
永久法蓮ト云者アリ傳ニ曰ヒ夫婦ト或ハ又云フ兄弟ト焉然ルニ高祖山家遊歴ノ之時一至リ此村ニ宿ヲ
寄セテ彼レカ家ニ而行化ス焉家主二人仰テ信シ伏ノ帰ス終ニ蒙リ化益ヲ建ニ立シ一宇ヲ以テ我カ屋敷ヲ
即為ス其ノ地ト亦則家主カ之法名呼レテ之名ヲ稱ス永久山法蓮寺ト矣黒川ハ元是レ金
山ヘ也山及ニ衰微一之後彼ノ寺ヲ移ス于赤尾ニ即今ノ之法蓮寺是ヘ也傳聞ク黒川ノ
古跡ニハ高祖御腰懸石有レト之云云

即時　休息二十六世　日退誌

甲陽休息山立正寺之來歴〈読み下し文〉

一　往古當寺ハ眞言家一流ノ棟梁也　霊験ノ地藏大士アッテ
大ニ安産ニ利アリ國人珍敬シ士女帰湊ス世擧ゲテ呼ビテ子安地藏ト曰フ
往古ノ大士今ニ至リ安置ス當寺尊崇スルコト猶昔ニ異ラズ
門徒伏仰シテ僧坊亦多シ世人皆子安千坊ト呼ブ　繁花ナル事
知ルベシ　亦今ノ境外遥カニ隔テテ大門渡場（ワタバ）、柘榴畠、舞臺畠等[13]
所々舊跡アリ往古ノ境地廣博ナル事察セヨ　柘榴畠ハ古ノ樹木林ナリ舞臺畠ハ下ニ記ス如ク也　時ニ文永ノ比（コロアヒ）
吾ガ祖日蓮大士適々山居爲サント欲シテ當國ニ入リ斯ノ所ニ來至シ給フ
地藏堂ノ側ニ盤石有リ安坐休息シ即チ四箇ノ名言ヲバ高聲ニ唱題シ天下太平
國土安隠ヲ祈リ立正安國論ヲ講談シ給フ　緇素貴賤群衆シ聞聴ス　謗ズル者ハ
多ク信スル者ハ少シ偶々信ズル者モ機生ニシテ尚未ダ熟サズ也　是レ則チ高祖
當國行化ノ最初也　今比處ヲ休息村ト曰ヒ宗祖安坐休息ノ處ナレバ自ラ呼ビテ休息ト曰ヒ終ニ村ニ名ク也　其ノ古ハ等力ノ郷北ノ原村ト曰フ也

一　宗祖身延入山之後三年ニ當リテ建治第ニ丙子ノ年宗祖ノ
直弟中老和泉阿闍梨公日法聖人、安國ノ講場ヲ慕ヒ立正ノ法流ヲ傳ヘント
欲シテ來リテ真門ノ寺主ニ應ズ　主一タビ見テ歎ジテ曰ク於戲（アア）先師石上ノ
講説、今猶耳ノ底ニ在リ公ノ芳訊、實ニ是レ宿植徳本之謂ナルカ　公爲ニ

重ネテ講ゼヨト　公其ノ請益ヲ随喜シ再ビ此ノ論ヲ演ブ　寺主熟聴シ發露
涕泣シテ一心ニ合掌ス　速ヤカニ法ヲ法師ニ受ケ信伏随従シ即チ法公ト倶ニ
延山ニ登リ高祖ニ對向シテ礼拝合掌シ欽ビテ吾ガ師日蓮聖人ト唱ヘテ舊執ヲ
改悔ス　師善哉ト讃メ即チ我ガ弟子日乗ト稱シテ説法教誡シ給フ也　乗愼ミテ
頂禮シ乃シ我ガ寺院ヲ法公ニ寄セテ専ラ此ノ經ヲ弘メント發誓シテ去ンヌ
則チ我ガ精舍ニ還リテ本尊ヲ改メ又且ツ吾カ師元祖日蓮聖人、第二祖ノ師
日法聖人ト仰ギテ是レ則チ師資相承也　之ニ依リテ後代日乗ヲ第三祖ニ列
シテ草創ノ本願ト爲ス
乗公ヲ式部阿闍梨ト号ス傳ヘ聞ク[14]
生處ハ當國俗姓ハ鮎澤氏ト云云
又日乗、法公ニ謂ヒテ言ハク高祖ノ御影ヲ刻彫セン事ヲ
請フ　法公即チ自ラ之ヲ刻シ堂ニ安置ス尊像現在ス　高祖入滅ノ後ハ
御影講ニ児ノ舞ヲ執リ行フト法樂セリ　是ハ元ハ権宗ノ時自リ児舞執リ行フガ故也　當時廃セリ舞臺跡今ハ畠ナリ則チ呼ビテ
舞臺畠ト言フ也　又寺山号ヲ改ム　眞門之寺山号分明ナラザル也　金剛山胎藏寺トハ傳説アリ云云　高祖休息ノ處ナレバ
山ヲ休息ト号シテ安國論講ノ場ナレバ寺ヲ立正ト号ク　具ニハ立正安國寺ト號ク然ルニ第七祖中興日朝之ヲ改メ
安國山立正寺ト號ク也云云　是亦一乘ノ精舍ヲ國ノ艮位ニ建テ論題ヲ以テ寺號ニ安ズル事
蓋シ是レ三國守護國家之道場ニ則トル者カ　宗祖ノ言ク佛法ノ
住處ハ鬼門ノ方ニ三國共ニ立ツト也云云　是レ則チ代々相承シテ國家安寧ヲ
祈ル　例年正月五日ニハ霊寶ヲ本堂ニ掛ケ闔徒丹誠ヲ抽テハ祈誓ス
須ラク知ルベシ宗祖安坐休息シテ専ラ天下太平國土安隱ヲ祈リ給フガ故ニ

*

*　山号ヲ或ハ子安山ト云フ云云

宗祖天下御祈禱之舊跡ナル也　是ノ故ニ年始ノ朝従リ歳末ノ夕ベニ至リ
鎭(シヅメ)ニ祈誓ヲ致ス事既ニ是レ年久シキ也　凡ソ宗祖休息ヨリ已來今年ニ至リ
四百有三十三年也　権門改宗已後今年ニ至リ四百三十一年也
乗公四十九歳ニシテ授法弘法三十五年　延慶三庚戌年
遷化シヌ　星霜八十有三　焉(コレ)爾來年今年ニ至リ三百九十七年也

一　當寺　往古ハ今ノ地自リ四町南ニアリ七祖日朝此處ニ移セリ　朝自ラ萬木
ヲ四方ニ植ヘ　植ユル毎ニ自我偈一反ヲ誦スト云云　佛閣神社方丈坊舍
悉ク建立スルガ故ニ中興開基ト爲ス　蓋シ古來大小僧坊コレ多シト雖ドモ
縮メテ十二房ヲ定ム也　地ヲ引キ移スガ故ニ當寺ヲ新立正寺ト云ヒ彼ノ旧寺ヲ
本立正寺ト云フ　茲ニ松子丸、亀壽丸ト云フ兒子アリ有ル聖人（日建ト号シ岡宮ノ歴代カ但シ宗派見ヘズ更詳）
亀壽丸ニ漫荼羅ヲ與ヘテ　本立正寺亀壽丸殿ト書ス[15]　是レ則チ新本
立名ノ證據也　八世日饒寺號紛爾タルコトヲ嫌ヒ本立正寺之正ノ字ヲ
闕略シテ本立寺ト名ヅケ　新ノ字亦タ闕シテ古來ノ如ク立正寺ト呼ブ也
日朝従リ第十七世日述ニ至リ代々兼職ス　然ルニ日述代ニ發心者アリ之ヲ
シテ本立寺ヲ守ラシメ而シテ後他ニ屬シ六十有餘年ヲ經タリ（其ノ旨別書委悉也此ニ盡スニ遑ヘズ往テ知ルベシ）
時ニ元禄第四巳未年二十二代日観公場ニ訴ヘテ勝利ヲ得ルコト疾(ハヤ)シ　茲ニ因リ[16]
日観更ニ別職ニ在リテ改メテ立正寺ノ末寺ニ定ムル也

一　當寺ト駿州岡宮光長寺ト倶ニ日法師ノ開闢ニシテ両一寺也[17]

亦則チ中老一葉一門派ノ首ナリ　中興日朝光長寺ノ職ヲ兼ネ
両寺悉ク建立ス也[18]　然ルニ日朝盛ンニ本勝迹劣之義ヲ宣ベテ洛陽本能寺
開基日隆ト一味同心シテ弘通東西、朝ハ東隆ハ西互ニ諾シヌ　長禄寛
正ノ比(コロ)アヒ専ラ之ヲ弘メ尓來休岡両山門流倶ニ延山ニ敵ス也　傳ヘ聞ク
曾式ノ兒舞黎民(レイミン)歌ヒテ曰ク身延法華　休息法華ト云云　然ルニ天正
年中當寺炎焼之節十二世日業ノ遺言ニ依リテ十三世日定代ニ一致ノ
宗派ニ皈（帰）伏ス（其ノ旨下記）　凡ソ勝劣ノ宗派ヲ立ツルコト朝従リ業ニ至ル百五十有
餘年也（朝従リ已前一致勝劣門流ヲ未ダ知ラズ朝之弘通ヲ以テ知ンヌ劣派ナルモノカ更詳）　抑々日朝ハ當處ノ出生之人也　両寺
兼職凡ソ四十八年ニシテ當寺ニ於テ化シヌ　焉(ココ)ニ遺言ニ曰ク盡未來際妙法ヲ
護持シ吾ガ廟ヲ鬼門ノ方ニ築ク可シト　則チ境内林ノ艮位ニ廟ヲ立ツ也
嗚呼日朝一何(はじめ)ンゾ誤レルヤ

一

第十二日業代田野ニ於テ勝頼公生害ノ時天正十壬午ノ年
三月三日辰ノ刻乱火ニ遭ヒテ七堂伽藍、鐘樓、皷樓等方丈
坊舎一時ニ焚焼シ郊原ノ地ト爲ル也　往古有來ノ佛像、經巻、祖師ノ
霊霊、法、乘両師并ニ歴代ノ本尊、朱印、黒印古來ノ筆記
珍財等皆悉亡失ナリ　當寺之重霊是ノ時廃(スタ)レリ焉ニ日業
身命ヲ惜シマズ火中ニ入リテ宗祖ノ尊影ト大霊霊一幅ト之ヲ抱ヘテ
逃ゲ去ンヌ　茲ニ奇ナル哉　宗祖金地ノ漫荼羅、大藏郷之筆、宗祖

開眼番神之画像一毛（ヒトツモ）　損セズ灰中ニアリ[19]　實ニ是レ火中之
蓮花ト謂フ可シ　爾來金地ノ本尊名ヅケテ青蓮華ノ本尊ト曰フ也　日業
倩々案ズナリ　當寺再興センコト我ガ力堪ヘズ　一致ニ皈依シテ方ニ相續セント
欲スト雖ドモ年漸ク衰老シテ遂ニ未ダ其ノ願ヒヲ果タセズ　天正十九辛卯ノ年
正月三日ニ化シヌ　焉ニ終焉ノ時ニ臨ミテ付弟實修院日定并ニ大衆ヲ集メテ
念願ノ旨趣精シク遺誡セリ　之ニ依リ同年同月速ヤカニ寺僧正覺房、本妙房
両使ヲ延山日新聖人之許ニ遣ス　新師称美讃歎シ慇懃
鄭重ニシテ即チ事報アリ　両僧ヲ結衆院主ニ任ゼラレ各々漫荼羅ヲ賜フ
今ニ至リ但一幅朽損スルノミ有リ正覺坊ハ信行院本妙坊ハ養學院ト也尓來當寺之一老ニ老ヲ定メテ結衆ト爲ス也　又十二房ニ欝
多羅衣[20]十二條ヲ賜フ也　是レ則チ一致改派之印也　粤（ココニ）ツイテ勝劣不轉ノ
道俗嗔恨ヲ懐キ末寺檀那多ク違背ス　焉ニ日定道心堅固ニシテ
專ラ一致ノ諸門ニ遊ビ再ビ當寺ヲ建立シテ先師日業之遺誡ニ達
スル者也　一致改派ヨリ今年マデ一百六年也

一　天正十九年二月　東照宮従リ當寺方丈坊中諸役免許
并ニ身延皈（帰）伏ニ就テ宗派皈伏　古來十二房之外ニ更ニ六房寄附
等之芳墨コレヲ成シ下サル也　入江右近殿　同名金七殿仰セニ随ヒ第十三世實修院日定ニ一紙ヲ下サレル所今ニ至リ有リ[21]
爾來新古都（スベ）テ十八房也　其ノ中ニ勝ル、ニ従ヒ或ハ由緒コレ有ルニ従ヒ
坊舎六軒ヲ擇（エラ）ビテ是ヲ役坊ニ相定メ門中ノ衆義（議）ヲシテ之ヲ評定セシム　又

同第二十壬辰ノ年文禄改元　二月制札之ヲ頂戴ス也

一　先年亂火之後一致ノ門派ニ皈（帰）伏シテヨリ已來（コノカタ）新師自リ乾（乾）師
四代之間芳恵ヲ蒙リテ當寺ヲ相續スルガ故ニ延山従リ末寺ニ爲サント欲シ
往覆（復）再三ニ及ブト雖ドモ儼然トシテ當寺ハ高祖休息安國講談之霊地
中老一葉法公門派之眷（首）ニシテ改宗ヨリ已來（コノカタ）三百四十餘年之
間一本寺ナルガ故眞俗俱ニ噉（取）テ之ヲ承ケズ　然ルニ四代ノ芳恵實ニ黙止シ
難キヲ以テノ故ニ若シ末寺ノ儀式諸役免許シテ古來ノ如ク一本寺之
格式ヲ爲サバ亦相随フ可キ也ト　之ニ依リ乾師並ニ大衆聲ヲ同ジテ曰ク由緒
有ルノ霊場ニシテ格別ノ舊跡也　冣（最）モ其ノ旨ニ任ス可シト互ニ領（サト）ル　深ク
諾シテ則チ慶長七壬寅ノ年三月第十四世性善院日應并ニ衆徒檀越一味同
心ニシテ終ニ末寺分ト爲ル也[22]　即チ時ニ乾師諸役免許之一紙ヲ賜フ也　尓來
今年ニ至リ八十有五年也　免許ノ一章日芳代元和年中自火炎焼ノ時亡失ス慳哉々々　是ニ亦
舊執ヲ忘レ難キ信福（伏）ノ檀越却リテ違背シ　竟ニ一宇ヲ搆ヘテ安國山立正寺ト
號シ岡宮ノ未寺ト爲ツテ當寺ニ怨スルコト今ニ至ルマデ止マズ　是レ自リ十餘町東ニ在リ村ヲ小林ト云フ也

一　慶長十乙巳年七月性善院日應適々延山ニ詣フデ當
貫主（首）日遠師ニ對向シテ曰ク　先年既ニ延山ノ末寺分ト爲ル　願ハクハ爲ニ常住
本尊ヲ授與セラレヨ　遠師甚ダ感心シ即チ應ジテ三枚續之本尊ヲ授與シテ[23]
曰ク其ノ寺由緒之有ルガ故ニ一本寺之格式也　之ニ依リ先年已ニ役儀宥恕

セリ　是ノ故今與フ所ノ本尊亦タ末寺ノ言バ（葉）ヲ安ンゼズ也ト云云　後ノ職遲（セン）師
授與之形模亦タ則チ末寺之言無シ　是レ正シク一本寺之格式ヲ守ル明證也（二幅現在）
予謂（ヲモハ）ク劣法改派ト本末約諾ト既ニ是レ二ヲ成ス　願フ所ノ本尊最モ是レ其ノ初メ也
常ノ途古來ノ末寺本尊末寺ノ二字ヲ安ンズルコト正ニ是レ一幅ノ要ト爲ス　況ンヤ今寺ニ於テヲヤ
其ノ言安ンゼズベカラズ　然リ之ヲ闕如スルコトハ是一本寺之格ヲ顯ハス也　其ノ格
至ル哉

一　先年之炎燒并ニ宗派皈（帰）伏之後日々ニ朽邁ニ及ベル也　然ルニ亦元和
元乙卯ノ年三月六日第十五世日芳自ラ火災ヲ得衰微
增々至レリ　再ビ之ヲ造營スルニ堪ヘズ　闔徒忙然トシテ憂（ウレ）ヒヲ懷ケリ　而シテ
已ニ衆嘆キテ曰ク嗚呼滅亡ノ時至レルカナト　粤（サ）テ岡宮小林等ノ舊執ノ眞俗
費（ツイヘ）ニ乘ジテ永ク當寺ヲシテ破廢セシメント欲シテ大イニ敵當ス　尓時延山
従リ與力ヲ加ヘラレル
（祝要両師之代也五月祝師遷化要師入山之故也）亦隱士日遠師従リ懇篤ノ直書ヲ賜フ[24]
（遠書今ニ在リ）之ニ因リ漸ク再興シヌ　焉（コレ）尓來今年ニ至ル七十有二年也

一　慶長ニ巳丑ノ年八月第十七世日逑　當寺領十八石
六斗并ニ寺中山林竹木諸役免許之旨ヲ蒙リ大猷院殿[25]
御朱印之ヲ頂戴スル也

一　當寺ハ延山末派爲ルト雖モ由緒有ルガ故ニ役儀免除ニシテ一本寺之格

式也　其ノ旨向キノ如シ　之ニ依リテ往古之寺法ヲ改メズ祖師會正日ニ之ヲ
執行　四箇ノ大會年中行事等皆古法ノ如ク之ヲ修シ坊張律師院主
日號之官職亦舊式ノ如ク之ヲ補任ス　延山ノ僧衆ト當山ノ徒衆ト會
合ノ座配ハ年老次第ニ之ヲ定ム　住持ハ延山ニ請ヒ或ハ復願ヒヲ述ブ也　年始
継目等ノ禮式時ノ宜ニ随フ也　登山并ニ處々ノ會席色衣紋
白之ヲ著ス（傳ヘ聞ク古來ノ聖跡延山之外休息小室東西両聖甲州三聖人云云）　身延門中回章ハ別
章ヲ蒙リ（其ノ證邏師直書之有リ）　弘通勧奨之時ハ先例ニ任セ許狀ヲ申受ク也（已上）

＊昔日休息小室両山ヲ呼ビテ東大坊西大坊ト曰フ也

予素文質筆藝並ニ乖（ソム）ケリ達者モ亦無シ　我レ今由緒之廢ルコトヲ勞シテ
聊カ舊記ヲ探リ潛カニ傳説ヲ尋ネテ筆ニ信（マカ）セテ記ス　焉ニ敢テ輕漫スルコト勿レ
唯是レ由緒ヲシテ廢亡セザラシメント欲スルノミ

維時
寶永第三龍集丙戌年五月良日

第二十六世
己心院
日退花押

追加

一　高祖斯ニ来至シ給フ時節ヲイハバ或ハ入國ノ其ノ年ト云ヒ或ハ其ノ翌年ト云ヒ或ハ身延入山ノ已前ト云フ皆是レ傳説ナリ　未決更詳　（身延は脇書）

一　高祖當處御休息之日數ヲイハバ或ハ二夜三日ト云ヒ或ハ一七日ト云ヒ或ハ又唯一日ト云ヒ或ハ又幾日ト其ノ數ヲ知ラズト云フ　亦皆傳説也未決更詳

一　或人曰ク行化ノ最初ト者高祖斯ニ来至シ給フ事若シ身延入山之後ナリト云ハバ最初之言未審ト云云　予ハ謂ク最初トハ安國論御講　即チ是レ當國ノ最初ナリ　焉ニ全ク身延入山之前後ヲ論ゼズ也　凡ソ高祖處々ノ遊歴須臾ノ間ヲモ行化無カランヤ　然ルニ今此處ヲ最初ト名ヅクルノハ正シク安國論御講之道場ニ依ル者也　抑々安國論ハ高祖行化之秘要ナルコト是レ勿論也　師當國ニ入リテ何レノ處ニ於テカ初メテ此ノ論ヲ講ゼルヤ

更ニ別處無キ故　今最初ト云フコトハ唯是レ安國論御講ニ在ル者歟　茲ニ因リ乗公改宗之時山ト寺ト倶ニ其ノ号ヲ改メ休息山立正安國寺ト稱ス　即チ是レ其ノ證也　例セバ比器（企）カ谷妙本寺ヲ最初轉法論之地ト名ヅクルガ如ク也何トナレ者宗旨建立行化之初メハ房州清澄寺也　自來西條、花房、小湊、奥津、笠森、須田、藻原等惣ジテ房州、上総、下総、武藏、相模五箇國ヲ經テ處々ニ行化シ尚鎌倉ニ至リ松葉ガ谷之小庵ニ住シテ行化シ給フコト最モ甚ダシ　然ルニ安國論之御製作既ニ成リ比器（企）ノ大學三郎殿之一覧ニ入レル所

正シク斯ノ縁ニ因リテ終ニ皈（帰）伏シテ地ヲ高祖ニ附ケラル　今ノ妙本
寺是レ也　是レ則チ宗旨建立ヨリ来タル安國論行化之最初也　依リテ名ヅケテ高祖最
初轉法輪之地ト稱ス　爲レ四箇之道場ノ随一ナリ　既ニ是レ房州已來處々遊
歴之後也　之ヲ思ヒ　然レバ則チ吾山モ亦是レ當國最初轉法輪之霊地ナルコト亦誰カ
之ヲ疑ハン　賢者准知セヨ

當山末寺赤尾村法蓮寺之由緒

法蓮寺ハ高祖大師御一宿ノ舊跡ナリ　原此ノ寺ノ在處ハ黒川村ナリ　往昔此ノ處ニ
永久、法蓮ト云フ者アリ　傳ニ夫婦ト曰ヒ或ハ又兄弟ト云フ　然ルニ高祖山家遊歴ノ時一タビ此村ニ至リ宿ヲ
彼ガ家ニ寄セテ行化ス　ココニ家主二人仰ギテ信ジ伏シテ帰ス　終ニ化益ヲ蒙リ一宇ヲ建立シ我ガ家屋敷ヲ以テ
即チ其ノ地ト爲ス　亦則チ家主ノ法名コレヲ呼ビテ名ヲ永久山法蓮寺ト稱ス　黒川ハ元是レ
金山ナリ　山衰微ニ及ブノ後彼ノ寺ヲ赤尾ニ移ス　即チ今ノ法蓮寺是レ也　傳ヘ聞ク黒川ノ
古跡ニハ高祖御腰懸石コレ有リト云云

即時　　休息二十六世　　日退誌

註

(1)『日蓮聖人門下歴代大曼荼羅本尊集成解説』昭和六一年　所載　四二頁一一一番　身延山久遠寺所蔵　嘉吉三年（一四四三）六月二日写御本尊は行学院日朝聖人真蹟に分類されるが、私見にては本果院日朝聖人の筆跡と考えられる。花押も文字の特徴も行学院の筆跡と異なる。この件は稿を改めて詳述する事とする。

(2)『桂林学叢』第一号（昭和三五年）二四頁

(3)『興隆学林紀要』（昭和六一年）拙稿二三頁

(4)前掲書二号（昭和六三年）拙稿九五頁

(5)前掲書一号　拙稿二六～二七頁

(6)「山伏門答」と内題のある長文冊子本で表紙を欠き年号、筆者不明物語風寺歴書が立正寺に現存。

(7)日暹（一五八六～一六四八）身延山二六世、身池対論の代表勝者、不受不施派を追求した。

(8)日傳（一二二二～一三〇二）小室山妙法寺開山、肥前阿闍梨、中老僧。

(9)『當山旧記控』天明八年九月休息知事の記事。この時座配は左を上席とした。

(10)柳沢吉保（一六五八～一七一四）は徳川綱吉の側用人、のち老中となり甲府藩主、正徳四年十一月三日歿五七才

(11)享保六年立正寺二七世日答師により成る。日答師は後、身延山貫首となり三十八世を継承。

(12)享保五年（庚子）冬遊甲陽休息安國山立正寺と末尾にあり仙臺孝勝兼飯高日潮題と印記ある詩文が立正寺に現存。

(13)「大門渡場」は今日の重川・田草川合流付近で今日の地名「綿塚」のあたり、「ワタバ」と「ワタヅカ」は「ワタ」の同音異字、「場」と「塚」は後世の写し違いではないか。「舞台」は同様にして今日の「仏体」と称される地と思われる。

(14) 岡宮光長寺同時二祖日春聖人は元台密の僧空存と称し日乗聖人と同族鮎澤氏と言われ両寺共建治二年を開創とする。

(15) 日建聖人は光長寺第七世、当本尊は立正寺に現存し光長寺と立正寺との関係を示す。他に建師本尊二幅光長寺に現存。

(16)「逞」はこえる、遠い、かけはなれるの意。

(17) 休息立正寺蔵、慶長七年（一六〇二）三月十三日の記録「休息山立正寺門末檀徒連印之証」覺之條（目）第一条に「光長寺・立正寺従前代両寺一寺之事」第三条に「立正寺ノ第五（実は第七）日朝聖人従久足出生被成光長寺を建立候テ終ニ者立正寺ニ而御遷化候　両寺共ニ聖人号自今其陰無ク候両寺一寺之證拠眼前候事」とある。

(18) 立正寺享保六年「過去帳」に立正寺「中興開基（岡宮光長寺中興）上ノ坊開基」とあり、上之坊天明元年「過去帳」に「当山七祖中興子安地蔵菩薩ノ化身ト云フ」とある。（前註参照）

(19)「灰中ニアリ」とは異説あり立正寺「霊宝曾説」（年号不詳）に「辺リナル松ノ枝ニ掛ケラセ玉フ事世ノ人ノ知ル所ニシテ」とある。両者伝承なるも災禍を逃れた事実を伝う。

(20) 三衣の一、上衣（欝多羅僧）十二條とは五・七條の事か。天正十九年一月日新師加判本尊現存。

(21) 天正十九年二月二日付実修院宛、入江金七書状は「地頭四奉行黒印御取次御添書　入江金七郎」と題する

包紙と共に立正寺現存。

(22) 慶長七年三月十三日付、「連印之証」はその控書（連印あり）が立正寺に現存。

(23) 慶長十年乙巳七月二十九日付　身延日遠師の当本尊は立正寺に現存。

(24) 日遠書状年号不詳、七月二十一日付立正寺に現存。

(25) 大猷院殿は三代将軍徳川家光、休息立正寺に古來位牌を安置し現存。

〈キーワード〉　本果院日朝　休息山立正寺　立正安国論　光長寺日法　立正寺日乗